

## 齋藤 朋人 氏 学位審査結果の要旨

主査：権 雅憲

副査：藺田 精昭、野村 昌作

肺移植の術後早期成績は改善傾向にあるが、長期成績は慢性肺移植片機能不全 (CLAD) に対する有効な治療法が確立されておらず改善がみられない。CLAD は、ドナー肺に加わる移植前後の組織傷害の蓄積により発生すると考えられており、齋藤氏は移植前ドナー肺におけるサイトカイン発現が、CLADの亜型たる閉塞性細気管支炎症候群 (BOS) 及び拘束型移植片症候群 (RAS) の発生に与える影響を検討した。両肺または心肺移植患者109例中、50名がBOS、21名がRAS発症を発症し、いずれも発症しなかったNoCLADは38例であった。3年以内にBOSを発症した症例とRAS群の生存率はNoCLAD群に比較して有意に低かった。また、移植前IL-6mRNA発現量は、RAS 群及びNo CLAD群に比較しBOS群で有意に高く、移植前IL-6mRNAの相対高発現がBOS発症の独立した危険因子であった。

本研究は、移植前ドナー組織におけるIL-6の評価が術後のCLAD発症の予測因子と今後の予防的治療の対象となることを示し、学位に値すると判断した。